

セレベス戦記

序

大東亜戦争、太平洋戦争、何と名づけようとかまわない。とにかく、「あの戦争」を冷静に、客観的にみることは、私にはとにかく苦手なのである。私が直接関わり合った部分については特にそうである。私は自分をジャーナリストの一人だと考えているが、あの戦争についてはどうも駄目だとあきらめる。情けないことだとは思いますが、あの戦争を知らねはずの人間が、あれこれと客観的らしく説明したり、解釈を加えたりするのをきくと、鳥肌の立つほどのおぞましさを感ずる。私の一生の一大事はあの戦争だったのである。あれに代わる一大事はまだ経験していない。私の生きていく限りには私は感ずることがないのではないかと思いはじめている。私には、あの戦争は、一生の一時期の中断、あるいは傍道的なエピソードではなく、最も重要な、いわば結論に近い意味を持っているのである。それは、あの戦争に至るまで、政策の立案に当たった当時の指導者たちの考え方や私の考え方が、一致していたとか、似かよったものとかではない。それどころか今にいたるまで私はあの戦争遂行責任者達には、軽蔑と憎悪を抱いている。その愚かしさにあ全たる思いがする。にもかかわらず、私が一生の結論だったというのは、私に最も近い一億の人間達が運命的に突入させられた生死の共通の体験が、私の全身を今尚貫いているからである。その中でみた日本人の姿のいくつかは、私の一生を貫いているのである。私の子供たちに、これと同じ感情を要求しても無理な話だし、全くそのつもりもない。しかし、どこかに、私のこの感情を書き残しておきたいとは、かねて考えていた。奥村さんは私の高等学校の一級上のひとで、ほとんど同じ教育を受け、同じ環境の中で、同じような運命を持ったのであろう。この本をかかれた動機も恐らく、今まで、ずっと胸の奥にしまいつづけてきたものを、とめることができずに書かれてのであろう。一読して、はなはだ失礼ながら、所謂商人の筆ではない、「息が先に走る」ものを感じた。それだけに生々しく迫ってくる。事実をよくたんねんにこれだけメモし、記憶しておられたものと感服し

た。恐らく、これまでに、断片的に多くのことを、何かに書きとめておかれたのであろうか。忘れようとしても、忘れることのできない記憶を、そのまま表現することは実は極めて難しいことなのである。文字にしたとたんに、これは別のことになってしまうことが多い。戦争の経験のごときは、その最たるものかもしれない。データとして数的に記録することはできても、戦争の全イメージを文章として再現することは文学の世界でも、成功している例が少ない。生死の圧倒的な重み、しかも戦争というものの中での生命の軽さが、文字を押しつぶすのだろうか。従って、器用に完成された文章の世界の戦争は、ひどく現実のものからかけはなれてしまうのであろう。奥村さんは、とにかく事実から一步もはなれまい、この感情をそのまま再現したい。死んでいった友の顔を忘れまいと、懸命に自分に言い聞かせながらペンをとったように見える。目の前に起こっている現実の社会の事象をみるにつけても、「あの戦争」は何だったのだろうと、今でも奥村さんはいつも思いつづけているのだろう。

昭和二十年、戦争終末の年である。一式陸攻という鈍足の攻撃機の一隊が、本土に迫った米海軍の機動部隊の攻撃に飛び立った。その一式陸攻の胴には、「桜花」と名づけられた一人乗りロケット噴射の小さい特攻機がつけられていた。そうでなくともおそい攻撃機に大きな重しをつけたようなものである。新幹線より大分おそい。米戦闘機にみつかったら万事休す。援護する戦闘機はごく少数だった。敵機動部隊の所在点まで、まだ百キロ以上もある海上上空には敵戦闘機が数百機待ち受けていた。直掩戦闘機はその群れに突込んで行った。攻撃機の編隊は裸になった。舌なめずりするように攻撃を加えはじめた。二十数機の攻撃隊の編隊は、一番外側から狙われた。やがてエンジンが火を吹く。支えきれなくなって落ちはじめる。火と煙の機から、搭乗員が隊長委に向かって、一斉に拳手の礼を送り、やがて機はどつとすべり落ちて行く。編隊を崩さぬままに、一機、また一機、外側からすべて同じ決別の礼を捧げて落ちて行った。そして最後に隊長機が焔とともに海に消えた。戦闘機が一機、戦闘機の隊長に無理に説得されてこの模様を報告に基地に帰った。硝煙に汚れた若いパイロットが、泣きじゃくりながら、「最後の模様」を報告した。隊長の名は野中五郎という。

彼はこの攻撃には反対だった。名攻撃隊長としての経験と専門家としての自負心が、兵器の常識と上記を逸した特攻作戦に反駁したのである。したがって、この出撃が、完全にかれの肉体とプライドの死であることを知りながら、長く生死を共にした、愛する部下と共に、理不尽な命令の下に、永遠の武将の最後を飾ったのであろうか。私にはこれを聞いたときの衝撃が三十年経った今も私を

あるからであろう。つらぬくのである。奥村さんには、もっと多くの激しい記憶が貫いているのであろう、

山口高校の同窓、桑原茂、原田耕次、乾正雄のこの本の出版に力をかされたというのもやはり同じ思いがあるからであろう。

目 次

序

死闘ハルマヘラ島

苦難の海

ガレラ上陸

空中戦

恐怖のワシレ

戦雲はらむセレバス島

危険海域突破

極楽の三丁目

火事場泥棒

メナド港

「赤道標」越ゆ

夜行軍

クワンダンまで

ワニの沼

軍司令部へ

山岳彷徨

山ビル陣地

ドンガラへ出動

艦砲射撃

地獄の山と川

絶壁に挑む

敗戦

逃亡兵

トラジャ高原の娘たち

原始のオアシス

死の行進

マリンプン俘虜収容所

餓鬼道

死闘ハルマヘラ島

苦難の海

昭和19年7月4日のあけがた、私はニューギニア方面に向かう輸送船の甲板にいた。

ニューギニア方面ということだけは知らされていた。ニューギニアの某地点に上陸するという噂だけで、実際はどこへゆくのか、行ってみなければわからない。すでに連合軍は、ソロモン群島およびニューギニア方面の日本軍を制圧したという悪いニュースが、ひんぴんと耳にはいつてきていた。わかっているのは、明日をも知れぬわが身、ということだけである。

私は一列縦隊ですすむ八隻の輸送船団（小型護衛艦一隻を含む）の第六番船に乗っていた。すべて海上機動第二旅団輸送隊（連隊長関根中佐）の将兵で、私は第一中隊第五小隊長であった。七月一日付で見習士官から少尉に任官したばかりのホヤホヤ小隊長にすぎない。

まだ若く、学窓から幹部候補生として陸軍に入隊し、一年かそこらで少尉の階級をあたえられた速成の小隊長で、われながら心もとないかぎりであった。いきなり修羅の海域にひっぱりだされ、実戦に参加するといっても、無我夢中の心境である。小隊五十名を指揮掌握するにも骨が折れた。

フィリピンのマニラを出航してからの六日間、航海は苦しかった。

船酔いに続いて、昼夜をわかつたぬノミ、シラミ、南京虫の攻撃にくるしめられた。ミンダナオ島の北東部スリガオ海峡を、東の外海へすりぬけたころ、敵潜水艦の魚雷攻撃をうけた。たくみな操

船で奇跡的な体かわしに成功したが、いつやられるかわからないという不安が心理的な影響をあたえ、兵の士気を鈍らせたことはあらそえない。

じかも、私は当時南方地域に流行していた悪性のデング熱におかされた。終始、四十度以上の高熱にうなされ、頭は狂い、意識はもうろうとして、うめきくるしみ、半睡半醒の状態でうわごとを叫びつづけた。食事もとれなかった。軍医は乗船していなかった。一片の氷すら与えられなかった。朝、熱がひいて、ひとときの

小康を得たとき、私は高鳴る心臓をおさえて、あえぎながら、目的地へ到着するまでに、最初の犠牲者として死にゆく自分の運命を思った。小隊長の任務どころではなく、部下に迷惑をかけるだけの自分がはずかしくてならなかった。

心弱く、病気であれなんであれ、連隊で第一番に死ぬのは、自分にちがいないと考えた。ぼんぼん育ちの青白きインテリで、何の役にもたない将校の自分をのろった。深夜、熱がたかまると、無意識のうちに衣服をはぎとり、禪一本の裸体となって上甲板へはっていった。少しでも冷たい鉄板上によこたわり、わずかなねむりをむさぼろうとするのであった。

わが海上機動第二旅団輸送隊は、昭和十九年四月一日、台南（台湾・安平）で編成された。装備は正規の歩兵一個連隊（隊長以下千四百名）であるが、海上輸送隊として舟艇が実戦時に配備されことになったおり、安平砂浜海岸での猛訓練は、主として航海・運用術および舟艇操作に集中された。部隊は連隊本部と四個中隊へ（一個中隊二百五十名）に、機動中隊を加えたものからなりたっていた。私の所属中隊は輸送隊第一中隊（中隊長中島中尉）で、私（奥村明少尉）は第五小隊長（小隊長以下五十名）であった。

輸送船の航行中、第一中隊長の指揮下に、台湾兵補百名がはいっていた。台湾平補は日本軍の補助平として台湾で編成された現地人の志願青少年たちで、第一線の後方で農耕・畜産・漁労など、食料物資を補給する任務をおびていた。目的地では、わが指揮下を離れるはずであった。兵補隊長は元軍曹の日本人軍属である。

私たち輸送隊の任務は、海上機動第二旅団（旅団長玉田少将以下四千名）の兵器・弾薬・糧食その他の物資を運搬する海上機動補給が主な任務で、決戦時には本隊と合流して戦闘に加わることであった。台湾で編成してフィリピンに移動したわが輸送隊が、満を持してマニラ湾を出発したのは、旅団本隊を追求合流するためにほかならない。

しかし本隊がニューギニアの某地点にあり、という想定以外に、具体的にはなにひとつ知らされていなかった。

わが輸送隊の本隊、すなわち海上機動第二旅団そのものの任務は、南方占領地域に反攻占領する米軍をめがけて、きりもみ逆上陸をはかり、敵を一挙に総撃滅することにあった。本隊は海上に浮遊待機する幻の機動部隊といってよく、その所在をあきらかにすることはできない。したがって、わが輸送連隊は、ニューギニア方面へ急遽向かえ、という暗号命令によって行動を開始しただけで、暗中模索、盲目的に南海の怒濤をかいくぐっているにすぎなかった。

連隊長自身もわからないのだから、私たち下級将校にわかるはずはない。また、奇怪で不安をそられるのは、舟艇機動部隊であるはずのわが輸送隊に、かんじんの舟艇が一隻もわたっていないことだった。舟がなければ、訓練の成果をあげることはもちろん、兵器・弾薬・被服・糧秣の補給という任務はたせないのであった。

すでにガダルカナルのわが軍撤退以来、南方の宣戦をひろげすぎた軍主力の分散・弱体化の盲点をつき、巨大な物量にものをいわせた連合軍の総反攻によって、敗退を余儀なくされている昭和十九年七月の時点で、なんともいえぬ不安のかけがえなく私たちをおびやかしたのも当然であつたらう。 Deng 熱でもうろう状態にいた私などは、暗い途方もない南の大海洋に浮かぶ幽霊船に乗っているような思いであつた。

上甲板で死人のように横たわっている私の耳に、がやがや何かしゃべっている台湾兵補の声が、潮騒のように聞こえた。雄鶏や豚の鳴き声がまじり、まぶたに明るい味爽の微光と潮風の匂いをかんじたまだ夢をみているようでもあり、あけがたの気配と涼しいそよ風の頬をなぶ感触に熱がさがったのかもしれないなどと思ってううちに、鶏と豚の声がはっきり私をめざめさせた。

貨物を積み上げた甲板上に、兵補が幸領し監視にあたっている子豚の檻と、金網張りの鶏籠が積み上げてあつた。けたたましく騒ぎ出した豚や鶏は、海上に夜が明けはじめ、目の前に陸地が広がってきたことを、私に教えた。上甲板に兵たちがぞくぞく集まってくる気配も、ただごとではなかつた。

船のエンジンの音が変わった。ガラガラと錨をおろす鎖が鉄板に擦れる音もまじっていた。はっきり私は目をさました。よろめく足をふみしめて、貨物に手をささえながら、舷側の手すりまで歩いた。

小型護衛艦一隻がつきそった七隻の輸送船は、数百メートル巾の水道を通過して、小さい湾内へ入ったのだ。私は手すりごしにゆっくり移動し、目の前にひろがる島、白く光る湾曲した渚と、うっそうとつづく椰子の木立を茫然とながめた。朝日は美しくかがやき、船は投錨をおえて、船腹に光の波紋をえがいている。ああ、着いたのだと思った。

「ここへ降りるのかな」

「なんという島だろう」

みんな好奇心に目をかがやかしながらかってなことを言っている。友軍のすがたはなかった岸線へはいあがっているマングローブの群落。砂丘につづく放射線に葉を茂らせた椰子。そのうしろはジャングルの樹海。不気味な絶海の孤島にもみえる。しかし、一時投錨しただけのことで、下船の命令は出なかった。湾内の海の色は不気味な黒紫色をしめしていた。水深はわからないが、珊瑚礁などのある浅海とちがって、かなり深い。

午前十時ごろに、黒いマングローブの茂みから、二人乗りのカヌー一隻が、数百メートルの海上にあらわれた。望遠鏡で眺めると、漕ぎ手は裸体姿の原住民で、あやしいものではないらしい。ここには原始土人も住んでいて、まるっきりの無人島ではないということだけがわかった。日本軍駐屯の気配もないこの小島の奥深い湾内をつぶさに観察すると、輸送船団の格好の待避場所なのかもしれなかった。休憩地点としては島影に遮蔽されて、奥深く湾曲された湾に身をひそめていると、外界からは完全にみえないらしかった。

航海日数と方角を考えあわせ、教材用の地図をみて推測すると、セレベス海中のタラウト島付近に点在する小島の一つともおもわれた。やはり、一時待避の場所であつたらしく、船団は夕暮れを待ってふたたび抜錨した。夜にまぎれての隠密航海が目的だったのである。夜行虫の光る波をきりさいて、船は全速で外海に出ると舳を東南方に向けて走った。その島は私には永遠に所在不明の地となった。豚や鶏はひっそりとなり、兵たちはふたたび明日をも知れぬ不安の身を船倉に横たえた。

私はまたも高熱にうなされた。どこへつれてゆかれるのかわからない。もし、生きていたとしたら、さしあたり明日の朝を待つしかないのであった。夜のやみに包まれた大洋のうねりのなかで、僚船のすがたもみえぬ心細さに耐えていると、奇怪な幻覚におそわれた。海上の忍者部隊、すなわち第二旅団本体など、どこにも存在していない。さがしてもさがしてもわからず、すでにニューギ

ニアの敵にひきつけられて、逆上陸どころではなく全員殲滅したあとだった。やっとニューギニア海域に旅団の船団を発見し近づいてゆくと、影のように姿を没した。それは旅団の亡霊だった。私はそのような恐ろしい幻覚を漆黒にうねる海上に眺め、全身にびっしょり汗をかいた。悪夢にうなされて目ざめたのは、一度や二度ではない。

Deng熱患者の深夜の妄想にすぎないのであった。 やっと朝がきたことは、鶏や豚の鳴き声でわかった。 大海原は紫水晶色にゆれていた。護衛艦のつきそった七隻の輸送船は、二列縦隊で時速八ノットのじぐざぐ行進に移った。危険海域を航行中の、魚雷攻撃から身をかかわすための体形である。赤道ラインも真近で、じりじりと身を焼く炎熱の直射日光は、病弱の息の根を止めるようにふりそそいでいた。人間も豚も、熱気に打たれて、はあはあ口で息をするだけであった。

しかし、貨物の陰で陸にあがった魚よろしく、口をパクパクあえいでいた私の耳に、兵の叫ぶ声が聞こえた。

「島だ！」

「たしかに、そうだ。こんどは大きいぞ」

「どこでもいいから、早く上陸させてくれ」

私は貨物のかげからはいだしていった。

白青色の島が前方に見えた。近づくにしたがって島の色は薄緑から濃緑に変化した。昨日の孤島とはくらべものにならないくらいの面積で、高い山が条々とそびえている。船団はジグザグを描きながら一列となり、水道とみえる海峡へすべりこんでいった。ここへ上陸するのは、ほぼ間違いあるまい。

午後一時ごろ、速度の速い護衛艦は、船団の前後左右をいそがしそうに廻りはじめた。その敏捷な動作が異様なものを感じられた。旗艦は逃げこむような姿勢で、水道の奥へ突入してゆく。最後尾から二番目の私たちの本船も、泡を食ったような全速で、前の船の後を追う。突然、爆雷破裂の轟音がおこり、船ははげしく震動した。反射的に棒立ちになった兵たちの血の気をうしなった顔をながめながら、私は思った。（これで一卷の終わりだ）。

私は観念し、兵たちの動揺をよそに、じっと上甲板にすわりこんだ。一本の魚雷がスルスルと目にもとまらぬ速度で近づいてくる。一しゅん後にわれわれを木っ端微塵に粉碎するにちがいない運命を、私は不思議な無感動の状態で待ちうけた。しかし、その魚雷は本船の鼻さきをかすめ通りすぎた。

護衛艦の舷から爆雷が連続投下された。轟音とともに白い水柱がいくつも立ちのぼるあたり、海中に没し去ろうとする敵潜水艦の黒いブリッジが見えたような気がした。

「やった。やった。やったらしいよ」

「うちの護衛艦、いいところあるで。敵さん、海底でお陀仏や」

そんな兵の声に拍手がまじった。海面は嘘のようにおだやかな色にかがやいていた。魚雷を受けた船は一隻もなかった。七隻は無事なすがたで水道の奥へ全速で進み、島を目前に、奥深い湾内へ侵入することができた。私はほっとして、自分の体を抱きしめた。生きている。しかも、壮快感がみなぎっている。不思議に、熱はさがっているようだった。潜水艦の出現と魚雷攻撃、動転につづく静かな諦観、刹那の出来事であったが、生から死へ、死から生へのめまぐるしい心理の体験は、 Deng 熱を吹きとばす作用をもたらしたのか。奇跡だった。

やがて「部隊はハルマヘラ島へ状力せんとす」の命令が出た。

この島が、ハルマヘラ島ということはわかったが、地図をひらいてもそれがどのあたりに位置づけるのかよくわからなかった。船員に教えられて、それが地図の上では南太平洋上のジャイロロ島のことであることがわかった。予想上陸地点とされたニューギニア西端より、赤道をはさんで北西三百キロの海上に浮かぶ島である。インドネシア東部モルッカ諸島のうち、最大の島とされているが、

古い地図にはジャイロロ島もしくはジロロ島としか記載されていない。

ニューギニアの西隣にあたるハルマヘラに上陸することは、やがて一日の航海差で達成できるニューギニア上陸にそなえたものなのか、あるいはニューギニア上陸を断念しての新しい作戦なのか、知るよしもなかった。あるいは、ニューギニアに逆上陸をはかる旅団本体の潜伏基地が、このハルマヘラになっているのか、そのへんのことも、作戦命令には出ていなかった。

しかし、いずれにせよ、八日間の船旅にうんざりしている私たちにとって、上陸命令はありがたかった。マニラを出航してレイテ島西方海上を抜け、ミンダナオ島、タラウト島、モロタイ島をへて、半死半生でたどりついたみどりの島であった。魚雷攻撃の危険海域を突破し、一人の犠牲者もなく、全員無事に上陸できる。こんな嬉しいことはなかった。大地が恋しかった。海上部隊でありながら、海の藻屑にだけはなりたくなかった。

兵たちはよみがえったように上陸準備にとりかかった。上陸するという精神の澁刺とした躍動感と、気を取りなおして上陸を指揮せんとしている責任感が、病気をわすれさせたのだろうか。マニラ出港時から、高熱に呻吟して、明日をも知れぬ死生の間をさまよいながら、十キロほどもやせ細った私が、はずんだ声で小隊の指揮をとっていた。

私は愕然とし、信じられなかった。身内から元気があふれ、若い血はふつつつと体内を流れ、猛然と食欲をおぼえはじめた。奇跡というより他はない。けろりとして、デング熱がなおっているのである。

本船はガレラ港に面し、海岸線より約三百メートルの沖合に停泊、上陸の命令をひたすらに待った。

ガレラ上陸

連隊命令で、私の所属する第一中隊だけがガレラへ上陸することになった。

護衛艦に護られた旗艦以下六隻の輸送船は、私たちに別れを告げ、夜陰にまぎれて出航して行った。ガレラから沿岸伝いにトベロ方へ、湾内の奥深く船体をかくしてしまった。ハルマヘラの重要拠点ということだけで、どこへ到着するのかはわからなかった。

たった一個中隊が分離し、どのような任務を帯びて、ガレラへ上陸するのも、わからなかった。しかし、航海はもうこりごりであった。私たちは、まっさきに降ろされたことを、むしろよるこんでいた。

ガレラはハルマヘラ島北端の東海岸にある最初の港であった。港には二、三隻の小型貨物船が停泊していて、海岸まで舟艇が行き交い、一見平和なたたずまいである。椰子林にふちどられた砂浜に貨物が山積され、軍用トラックも二台ほどみえて、数名の日本兵が手をふっていた。

椰子林のうしろから、によっきりとすりばち型の山がそびえていて、炎をもじえた黒鉛が青空に吹き上がっているのは、活火山であろう。上陸地点左方の海岸はマングローブが匍い上がっているが、その付近の海面が分厚く盛りあがり、およそ直径数十メートルにわたって海の色が白くわきわたっているように見えるのは海中温泉なのかもしれない。いずれにせよ、島は平穏で美しかった。

日本軍が占領中の島で上陸に何の危険もともなわないと知れば、私たちは航海中の疲労もわずれ、あたたかい大地の揺籃に抱きとられる思いであった。軍装に身をかためて上陸用のボートの順番を待つあいだに、猛然とスコールが一過して甲板を洗い流した。悲鳴をあげながらも、養豚・養鶏係の兵補たちは嬉しそうに、ケッケツ、ブーブー鳴きさわぐ家畜の上陸準備をしている。スコールの去った甲板に強烈な西陽が射して、もうもうと湯気が立つなかを、私は小隊の兵を1人一人点検しながら、舷側からボート上にたれさがった索梯へおくりこんだ。

最後の私はボートへ降りた。海岸線の上陸地点までこいでゆくと、浮ドラム缶に薄板をしぼりつけただけの浮棧橋ができています。一列縦隊でゆらゆら揺れる浮棧橋の上をよろけながら進み、ぱつとしめった砂浜へ跳躍する。透明できれいな波が渚の砂をなめている。まだスコール後のもうもうたる湯気がたちのぼる砂浜を軍靴でくぼませ、第一歩を印した大地の感触はすばらしいものだった。

海岸線に椰子林を背後にして整列、「番号」をとる兵たちの声も、元気にあふれている。中隊長を先頭に、宿営地へ行進をはじめようとしたとき、突然、地鳴り震動して、閃光が天空をはしり、活火山が爆発した。ぐらぐらと足をとられ、一瞬、目がくらんで、散開、その場へ伏せをする兵もあったが、笑声とともに噴煙をあおいで起きあがった。敵襲ではなかった。

一刻、肝を冷やしたが、敵襲でないとなると、活火山の爆発にともなう鳴動、地震も、異様なさまざま光景も、妖しく美しい南国の島を観光しているかのようなスリルを味わったにすぎない。

「ほう。どえらい地震の島へ来たもんやな」と、めずらしそうな顔つきで、しゃべりあっている。

熱帯の真赤な大日輪は沈もうとしている。日没の赤い光を浴びながら、気宇壮大な感動に包まれ、私は小隊の先頭を歩いた。艦上で豪雨をまともに浴び、全身ずぶぬれになったはずなのに、デング熱のふるえはあついにやってこなかった。スコールが高熱を誘うどころではなく、むしろ熱帯病の毒を根底から洗い流してくれたようなものだった。人間のからだというものは不思議なものである。私は自信がでた。かんたんに、くたばるものではないらしい。

宿営地へ着くまでに、海岸線の椰子林を背にした現住土民の集落を見た。上陸したばかりの日本軍の行進を見物しようと、小屋から出た来る土人の姿は、全身黒褐色の裸体であった。黒くちじれた丸刈頭で、禪様の布を前に通しているだけの、ちょうど写真でみたことのあるニューギニア土人とかわりがない。原始野蛮のままの姿である。

あとから知ったことだが、かれらはマレー先住民の一つであるアルフル人（Alfur）に属し、野生のサゴヤシの髓心を主食として、ほとんど農耕を行わないとのことである。

私たちの宿営は椰子林のなかに設けられた。宿営地という以上、友軍の施設で、建物らしいところへ連れてゆかれるものと甘く考えたのはまちがいで、「このへんで勝手に寝ろ」ということなのであった。仕方なく椰子と椰子の幹にロープを張りわたし、その上に携帯天幕をかけて屋根とした。スコールで濡れている下草をしとねに、毛布をじかに敷いて寝る。簡単な椰子林のなかの露営であった。

飯盒炊飯を終えて満腹すると、あとは寝るだけであった。船中では熱にうなされて、心地よく熟睡したことがあない。今夜は健康体でゆっくりねむれるかと思うと、草のしとねも悪くなかった。

椰子の梢から月光がしたたり落ちていた。壁のない露天の寝室なので、風が入ってきて涼しく、身を起こし、空をあおげば月もみられた。まことに風流である。

しかも海岸線の風に乗って、近くの土人部落から、楽の音に合わせて奇妙な歌声がきこえはじめた。玩具めいたギターをかきならし、指先で太鼓もたたいているのかもしれない。ときどき合唱の音が大きく流れてくるのは、風のせいであろう。エキゾチックな南洋土人の音楽と歌は、歓迎の子守歌ときこえ、恍惚とした眠りへ誘いこまれるようであった。

耳をかたむけていて、おやおやと思った。奇怪なアクセントではあるが、たしかに、「色は黒いが、南洋じゃ美人・・・椰子の木陰でテクテク踊る・・・」とやっている。兵たちは手をたたき頓狂にわらった。

友軍の兵は土人部落にも近づき、そんな日本語の歌などを教えこんだのであろう。まことにほほえましく、そのこと自体この島の平和を証言するものだった。私たちは安心して、ぐっすり泥のようなねむりにおちていった。

しかし、夜中にスコールでたたき起こされた。端幕のつぎめからザアザア雨が流れおち、寢床はたちまち水びたしとなった。あわてて飛びおき、びしょぬれの毛布をたたみ、天幕の補強をし、襖一本で円匙や十字鍬をふるい、周辺に排水溝を掘ったが、すさまじい豪雨はすべてを押し流す勢いで、たちまち洪水と化した。

豪雨一過のあとも、水はひかなかった。ぬれ鼠のまま、立って寝るより仕方がなかった。寒かった。私は Dengue 熱の再発をおそれて、からだを動かすことにつとめた。スコールを恨むのはまちがっている。月と涼風と、土人の楽の音に甘え、設営の手をぬいたのが、あやまりだった。

朝、嘘のように晴れあがっていた。植物は生き生きと太陽に向かって葉をのびし、葉末にたまった雨滴をエメラルド・グリーンにかがやかしていた。歓喜にみちた小鳥たちのさえずり。あけがた、私は若干の悪寒をおぼえただけで、極楽にもひとしい大自然の風物と、あたたかい日の光に包まれると、たちまち元気を回復した。びしょぬれの衣服と装具をかわかし、朝食後は小隊を引率して、建築資材の収集にでかけた。

上陸後の約十日間は、掘立小屋の建築に精魂をかたむけたのであった。

椰子を切り倒して材料に使うことは、軍命令で禁じられていた。椰子の実や髓心を主食とする土人たちにとっては、生命と同様椰子は唯一の財産であり、宝物にちがいがなかった。日本軍があらしではならないという軍命令は、当然のことと思われた。しかし、この付近は椰子をおいて建築材料に適する樹木はほとんどみあたらないのであった。椰子の幹を切って柱や床に使い、葉をよりあわせて強靱な屋根を葺くのが理想だったが、私たちは横目にみて通りすぎねばならなかった。

私たちは近くの密林地帯へわけ行って、灌木を切り倒し、分厚く巨大な熱帯植物の葉を駆り集め、藤に似たつるなどを運搬してきて、乞食小屋にひとしい厩舎をつくった。

ふしだらけの、ひんまがり灌木の幹をならべて床とした。床は地面から1メートルほど揚げ、天井は細い灌木の枝を差しわたした上から天幕をかけ、木の皮や葉をのせて葺いた。それでも、大スコールのばあいの雨漏りは避けられなかった。

寝ていると背中に床柱のふしやコブがくいこみ、ところどころにアザができた。草を駆り集めてきて堆積し、その上に毛布を敷いて寝ても痛かった。「痛っ、痛っ、ああ板がほしい」と誰かが悲鳴のような洒落を言っている。スコールが襲来すると、あいかわらず立って寝たり、立て膝を抱いてしゃがみこんだりしていた。

建築資材はなく、またのこぎりやなたやかんななどの道具もなかった。しかあも、撤収の命令がいつ下るかわからない。いつまで同じ場所に起居するやら、中隊長さえ見当がつかないのであった。どこへ移動しても、自分の手で材料を集め、家を建てなければならぬのであった。しかし、私は健康に自信をもち、つかの間の平和かも知れないが、住めば都のハルマヘラ島に愛着をおぼえはじめていた。

小屋ができると、毎日小隊をひきいて、ガレラの港で荷役作業に従事した。はげしい労働にひきかえ、食料の給養は次第に悪くなっていった。

米はかびだらけの、鼠の小便くさいパサパサの外米にかわった。副食は、さば、いわし、さけ、牛肉の缶詰のほか、乾燥野菜で、調味料は粉味噌、粉しょうゆ、塩などであったが、次第に分量をへらされていった。新鮮な野菜や果実は、ほとんど口にのぼらなかつた。食料の配給が、きわめて窮屈に乏しくなつてゆくということは、この島の籠城がかなりの期間にわたることを意味するのだろうか。そこに不安が生じたが、長期駐留のための自給自足体制は、不可能の環境と思われた。

兵たちは軍命令で禁止されている原住民の室に手をだしはじめた。椰子の新芽や、バナナの幹のしんを切り取ってきてはむさぼり食つた。壊血病の徴候をみせはじめた兵たちにとって、それは生きるためのやむにやまれぬ要求であつてみれば、厳禁は心なきしわざというべきであろう。私はみてみないふりをした。

兵補たちは海岸線で中隊の所属をはなれ、ガレラの奥地へはいつて行つたが、さもしの中隊の兵のなかには

「ああ、鶏の二、三羽くらい、船のなかでかっぱらっとけばよかったなあ」

などといってよだれを流した。どうせ、いまごろ、飢えた先駐部隊の餌食になっているのが、おしん現実というものであろう。そんな卑しい憶測をしながら、椰子の芽やバナナの幹のしんを飯盒に入れて、ゆでている。

これは唯一の生野菜にかわる食料となったが、アクが強く、灰汁で何度も何度もアク抜きをしていた。

「小隊長殿、自分たちがジャングルの野草採集で発見した植物の芽ですよ。ちょいとにがいけれど、いけませ」などと、薄笑いをもらしている。

飲料水もひどいものであった。石灰質の隆起珊瑚礁から成っているもので、いくら濾過しても白濁していた。飲むと口中がざらざらした。

しかし、平穩無事の日が当分つづいた。その間に、先駐部隊の将兵とも顔なじみができはじめ、次第に島内の状況もわかってきた。ハルマヘラ島がどんな島で、日本軍がどのくらい駐留しているのか、作戦上どのような意味をもつのか、ということなどがわかってきた。結論としては、それほど安閑としていられない状況と思われた。

島の形態は、セレベス島を小型にしたような特異のK字型で、面積は一万八千平方キロ。日本の四国とほぼ同じ面積である。全島密林に覆われ、山地は急傾斜が特徴である。最高点の山はガムコノラ山で、標高三千メートルにおよび、五つの活火山は、いずれも千メートル以上あった。

人口は五万人と推定されている。昔、ヨーロッパ人が香料を求めて来島し、キリスト教の布教につとめたこともあったが、何しろ赤道直下の過酷な気象条件と、危険な山岳密林に覆われ、かつ全島が巨大な活火山として、爆発をくりかえしているのです。安閑と住んではいられない。何ら開拓されることなくヨーロッパ人にみすてられ、爾来、原始野蛮の状態のまま今日にいたったのだと言われている。キリスト教布教の名ごりが、テルナテ、ティドレの町などに残されて、いくぶんひらけているほかに、海岸線に小さい部落が点在しているにすぎなかった。住民は漁労、狩猟を原始的な方法で行い、収集経済が主で、風土病の蔓延にも何らの対策をたてていない。完全に文明からとりのこされた島なのであった。

ハルマヘラ島駐留の日本軍は、五万と推定されていた。それは最盛期のことで、いまはセレベス島に主力が移されていた。セレベス島の第二方面軍司令部の指揮下にある航空部隊と歩兵部隊が中核体で、確実な編成装備は機密に属しているらしい。島内には緒戦上陸の際に東南太平洋の重要軍事施設として作られた飛行場が四箇所もあり、密林内の丘に高射砲陣地が敷設されているということであった。どの程度の兵力、飛行場規模、戦闘機・爆撃機などが保有されているのかはわからない。しかし、ニューギニアを席捲して西へ西へと反攻のほこさきを向けているらしい米豪連合軍の作戦を予想すると、確かにハルマヘラ島は東南太平洋の絶対防御線であることがわかる。ニューギニアから隣接のモロタイ、そしてくびすを接するハルマヘラへ上陸してくるコースは、だれの目にもあきらかだった。ハルマヘラからセレベスへ、セレベスからボルネオを経て飛石づたいにインドネシア全島をほふり、おそらく英軍との共同作戦にはいって、スマトラからシンガポールへ反攻を企てるのはまちがいあるまい。するとどうしても、「ちょっと待て」と大手をひろげて敵を制止し、絶対にくいとめねば最東端の拠点、ハルマヘラ島ということになる。

すでにニューギニアが敵の手中におちているとすれば、ハルマヘラこそ死守しなければならない絶対の島である。しかし、ラバウルを撤収した今村均司令官のひきいる十万の軍が、戦略上枢要なところとなったハルマヘラ島へ移駐させるという大本営の方針も、急に中止となったという噂は私たちを不安にした。この絶対あとには引けぬという最前線拠点に、増援の大部隊が投入されないということ、最前線五万の日本軍がセレベス島へ後退し、私たちが危険な島へおくられてきたことの不安であった。

いったい、かんじんの第二旅団本体はどこにいるのだ。合流した気配もなく、輸送隊の任務である舟艇もあたえられず、たった一千そこそこのわが連隊が、まいにち腹をへらして荷役作業をやっている。まだ敵襲の気配はなかったが、一見平和な島のったたずまいが、かえって不安をそそるのであった。

そして、いつのまにか半月が過ぎた。

空中戦

先駐の友軍歩兵部隊は、敵の上陸にそなえて、海岸線の各所に戦闘壕、蛸壺、銃座などをつくっていた。円匙で壕の土を掘り起こしながら、「自分の屍を埋める壕を掘りよるんじゃ」と、ひげ面の兵が汗をふきふき、通りがかりの私たちにいった。

かれらに話を聞くと、敵は近じか上陸用舟艇で大挙上陸してくる、その前に砲撃と猛爆を加えられるのは必至で、こんな壕など何の役にもたつまい、というのである。

かれらとて、全般の状況を把握しているわけではなかった。単なるうわさ、憶測にすぎないが、敵はすでに西部ニューギニアのビアク島の日本軍を玉砕に追いこみ、ヌンホル島を上陸占領し、それらの飛行場を拡大整備して、ビアク島、モロタイ島、ハルマヘラ島を爆撃圏内におさめているというのだった。まだハルマヘラ島上空は、友軍偵察機・戦闘機で護られており、敵機の侵入をゆるさぬように見えるが、実は六月の末ごろから、敵に制海・制空権をにぎられてしまっているのだという。噂にしても、はなはだ悲観的な、おそろしい話であった。

私は小隊の兵たちに、「流言にまどわされるな」と、士気を鼓舞するために言ったが、内心の不安は増すばかりである。

命令があいまいなのが何よりも気がかりだった。緊迫した状況なのに、防空壕を掘るのでもない。斬込隊を編成して、奥地ゲリラの訓練をするのでもない。沖仲仕や海辺の荷役作業だけで、毎日雨漏りのする掘立小屋に起居し、みんな下痢をおこして氣息えんえんとしているだけの生活。これではいくら口で喝を入れても、士気の鼓舞しようがあるまい。そして、私自身も猛烈な下痢に苦しむようになあっていた。

なんとしてもくやしいには、大勝利をはくした緒戦で、次々に占領していった島々が、敵の反攻に遇ってもろくも奪い去られてゆくことであった。アッツ島の玉砕（昭和18年5月）以来、玉砕とか全員戦死とかのいやな情報が、私たちの耳にも入っていた。なぜ、こんなに戦域を広げてしまったのか。なぜ、長期戦が我が国を危険にさらすことなど、大本營の参謀たちにわからなかったのか。負けいくさのまっただなかへ、突然ほうりこまれたところで、私たち弱小の将兵はなすところを知らぬ。

血便にあえぐ下痢患者の悲観的な妄想にすぎないかもしれないが、私は部下を叱咤激励しながら、内面では戦争というえたいのしれない不条理とたたかっていた。しかも私は、日本が負けてしまふとは思いたくなかった。他力本願ながら心の底のどこかで、神国日本の勝利を信じようとしていた。

先駐友軍の噂話は、やがて現実となってあらわれはじめた。私たちの不安な憶測も、根拠のないものではなかった。七月二十日、はじめてハルマヘラ上空に敵機をみたのである。

一万メートル上空を飛来してたちまち東方に消えた敵機は、アメリカの新鋭戦闘機 P38 型機であった。その日はガレラ上空を旋回しただけであった。二十二日には数機侵入してきて旋回後遁走し去ったが、二十四には一機が低空降下、海岸線の私たちに威嚇の機銃掃射を加えて、あざ笑うようにとび去った。

二十五日には米軍のそらの要塞といわれる大型四発 B24 一機が、P38 二機を護衛に従えて、ゆゆと一万メートルの上空にあらわれた。地上攻撃はほとんど行われなかった。それ以来、敵機は一日も欠かさず来襲したが、空中戦闘を避ける高度をとり、わが戦闘機の追跡挑戦を尻目に、ゆゆと消え去った。

これらは偵察が目的で、飛行場および高射砲施設、兵器・弾薬・糧秣庫などの軍施設を、島の地形地物などとともに、詳細な航空写真記録するものと思われた。ということは、本格的な砲爆による攻撃・上陸作戦がはじめられることの準備行動にほかならない。

覚悟を決めねばならなかつた。もはや、ばかばかしい荷役作業などに精力を使っているわけにはいかない。舟艇輸送のにんむなどはどうでもよかつた。敵上陸に際しては、斬って斬って斬りまくるより仕方がないではないか。私は一刻も早く、ふらふら腰の下痢をなおし、精気をとりもどす必要があつた。

いままで、衛生兵からクレオソート丸をもらって服用しつづけたが、いっこうによくならなかつた。ある日、先駐友軍の兵士から、奇妙な下痢の療法を教えられた部下が、

「消し炭が効くということですよ。土人がやっているそうですが、この際、溺れる者わらにもすがるといふわけで、ためしてみませんか」と、私に言った。

まさかと思ったが、一笑にふすわけにはいかない。私は思い切って生体実験をやってみることにした。

飯盒炊飯のあとの消し炭を湯でとかし、「良薬は口ににがし」とつぶやきながら飯盒のフタで嚙下した。じかに、ジャリ、ジャリとかみ砕いてもみた。苦しみ、むせた。ダメであっても元々である。

二十七日にロッキードP38戦闘機が、三十機以上の編隊でおしよせてきた。ちょうど昼食のため宿舎へもどり、飯盒のメシをかきこんでいたとき、私たちの頭上に現れ、低空で旋回した。飯盒と箸を投げ捨てて散開、伏せをしながら上空をあおぐと、怪鳥の群れのように左右上下に飛びかう敵戦闘機は、吹きなびく椰子の梢の葉陰に、びかびか金色にかがやいていた。

すると北西の空より、黒い戦闘機が二機、はやぶさのように現れて、P38の大群にいどみかかった。胴体に日の丸を描いた友軍機は、勇敢にも乱舞する敵機の真ただ中へ、一文字に突入した。機銃で撃ちまくりながら、体当たりでもつれ合い、旋回、上昇、急降下の曲芸を演じての死闘をくりひろげた。こわさも忘れて躍り上がり、拍手喝采、声援をおくる兵もあった。凄惨な空中戦をはじめてこの目で見た。

しかし、多勢に無勢、肉弾突撃の特攻精神をもってしても、わが戦闘機は巨獣にいどむ灯籠の斧にひとしく、たちまち撃墜される運命だった。群がり寄る敵機の銃弾を全身に浴び、ぱっと空中にひろがりのびる黒煙のうずまきをを残して、細長いわん曲をえがいた黒煙を縦に描き、赤い炎に灼かれたままの友軍機一機は、まさかさまにジャングル内へ墜ちていった。

私たちは声を飲み、それから地団駄をふんで悔しがった。

「ちっくしょう、そのうちに粉々にしてやるから」

と、悲憤の涙をうかべながら空をにらんだ。わきおこる激しい感情は、ひとしく敵に対する憎悪であった。とはいえ、数分間、白い巻雲のちらばった青い大空を背景に、林立する椰子の梢の上で展開された空中戦は、凄絶な地獄絵でありながら、週末の美ともいふべき印象で、いつまでも臉に焼きついていた。

敵機は態勢をととのえ、見事な編隊を組んで東の空へ飛翔し去った。と思うと、不意に天地鳴動の轟音がおこり、掘立小屋がはげしくゆらいた。例の活火山が爆発したのか。

空中戦のあとくびすを接しておこった大地を揺り動かす爆発音に肝をつぶし、ふたたびその場にひれふしたが、やがて敵編隊の爆音が頭上をかすめ、海上へ遠ざかるまでに、前後十分ほどしか経過していなかった。

悪夢からさめたように顔を見合わせ、ふたたび散らばった飯盒をかきよせた。理性をとりもどしてよく考えると、いつもの活火山の爆発とは、轟音も振動もちがっていた。やっと気がついたのは、活火山の方向とは少しずれているガレラ飛行場が狙われ、集中攻撃をうけたのだということだった。

飛行場は完膚なきまでに粉碎されたのである。綿密な計画のもとに航空写真を撮って行った敵は、その第一段階の実力行使を飛行場粉碎におき、本格的な作戦に入ったものと思われる。旋律すべき事態が、つぎつぎに私たちを見舞うだろうし、もはや逃げられない。極度の緊張感ののち私はまたも意外なことを発見した。

ぴたりと下痢がなおっていたのである。はたして消し炭の靈験だったのかどうか。それはわからない。

敵機の前に、ただあれよあれよというだけのアリの群れにひとしい私たちは、早く人並みの任務につきたかった。逃げまどうだけでは、なんのためにガレラにいるのかわからない。舟艇をもらい、本来の任務につけるのなら、たとえ弾丸飛雨のなかも突破し、ニューギニアの敵中であろうがどこであろうが、全力をつくすことができるであろう。積極的に戦闘に参加できないために臆病風も吹き、意気も阻喪するのである。

私たち第一中隊は、ガレラに封じ込められ孤立しているようなものであった。もう数日もすれば殲滅させられているかもわからない。心細かった。せめて連隊本部や他中隊と合流したかった。

連隊主力は、ガレラから海上百キロの湾の奥のワシレにいるという情報がはいていた。

なぜ、第一中隊だけがガレラに分駐しているのか。作戦の意味も任務もわからなかった。連隊命令では、別命あるまでガレラに駐屯せよ、ということになっていた。別命とは、ワシレから迎える輸送船を派遣するまで、ということらしかった。ガレラの港には、小型貨物船が二、三隻いるだけで、私たちをマニラから運んできた輸送船は影も形もなかった。うわさによると、外海を船団が航行できたのは、あの時がピークであった。今は敵潜水艦の跳梁と航空機による猛爆のまえに、安全

な航海は不可能になってしまったという。ということは、迎への輸送船も不可能になったかも知れない、

やむをえず中隊長の独断で、ワシレへの移動が協議された。しかし、機動力のない行軍で、ガレラより東海岸沿いにカウを経て、ジャングルを迂回突破し、カウ湾を弯曲してグルワからワシレ湾にいたる難コースは、考えただけでも不可能であった。海上のように平たんではない三百キロの難行軍を堪えぬいたとしたところで二、三カ月はかかるであろう。すると、あくまで任務もわからないガレラにふみとどまり、爆撃や機銃掃射の恐怖にさらされながら別命を待つよりほかはないのであろうか。

しかし、何らかの行動をおこさずにはいられないさしせまった状況である。港の小型貨物船は集中爆撃を受けはじめた。もはや荷役作業なおはじていられない。連隊から孤立し、任務を放棄して、ジャングル奥地に入って敵上陸に備え、独立中隊のゲリラ切り込み隊を編成するか、ワシレへの陸路移動をあえて敢行するかを決定を迫られた。

ちょうどそのとき、（7月31日の夕刻であった）赤さびだらけで船尾に大穴のあいた船が、よろけるようにガレラの港へ滑り込んできた。三百屯旧の鉄鋼船である。ボートで伝令を送り、この船が今夜中にワシレへ隠密直行する僚船であることがわかった。奇跡の生き残り船である。

連隊本部からの迎への船ではない。しかし、この船をおいて、他に転進の方法はなかった。中島中尉は露営点に中隊全員を集合させて、命令した。

「移動準備。中隊はこれよりワシレにむかって出航せんとす。一時間以内に乗船完了せよ」

中隊長の英断であった。ちょうど飯盒炊飯にかかろうとしていたときだったので、てんやわんやの大騒ぎとなった。兵器・装具をまとめ、宿舎の後始末、飯盒炊さん、食事・・・と蜂の巣をつついたような騒ぎだった。

軍装をととのえ、整列を終えるまでに、三十分とかからなかった。「急げ、急げ」と尻をたたかれても、誰ひとり不平をいうものはなかった。これこそ文字どおり「渡りに船」というべきであろうか。どのような危険が待ち伏せていようと、ここから立ち去るというだけで、新しい力がわいた。w

超人的な早業で出発準備を遂行しながら「飛ぶ鳥あとを濁さず」の心づかいも忘れなかった。

若い現役の中尉で、八字髭を生やした中島中隊長は、精悍な顔に爽やかな微笑さえたたえて、軍刀を抜きはなつた。

「中隊は海岸に向かって早駆前進。指揮班、一、に、三小隊の順序。右向け右つ、前へ進めつ」。

号令をかけるないなや先頭へ走り、二百五十名の中隊はあとに続いた。

出発まで三十分、港棧橋からボートに分乗して、本船に乗り移るまで三十分、一時間のあとにはもう、なつかしいガレラの港を離れていたのである。

恐怖のワシレ

私たちを乗せた小型鉄鋼船は、途中、トベロの港に立ち寄ったので、ワシレに着いたのは八月一日の正午であった。棧橋に降り立つ最中、敵大編隊の大爆音。十数キロ先の友軍ハタタコ飛行場が全滅。ワシレ着があと数分遅れていたら、我々の船も海上で間違いなく発見されて全滅となっていたであろうと肝をひやした。

ここは、ガレラよりはるかに大きな港で、貨物船も数隻入港しており、海岸線に積まれたシート掛け貨物の山も多く、軍用トラックの往来、棧橋付近で働く荷役作業の兵員も、すべて大掛かりである。ワシレ港の海岸線は、南北総延長五十余キロもあり、棧橋は日本軍が名づけた七地区にわかれるほどの規模をもっていた。私たちは丙棧橋へ上陸したのであるが、ガレラのようなドラム缶の仮浮棧橋ではなく、頑丈な本構造で大型発動機船が横付けで乗降できた。ワシレはハルマヘラ島の中心部に位置し、北緯一度である。ハルマヘラ方面軍（師団）司令部の所在地にもなっていた。

わが連隊本部は、丙棧橋から数百メートルのジャングルを背景にした山の中の谷間に駐屯していることがわかった。ただちに、関根部隊の指揮下に掌握されたが、当分、丙と丁棧橋の中間渚に露営を命じられた。連隊本部や他中隊から離されて、またお掘立小屋をつくり、荷役作業やトラック

運搬に従事した。ガレラのとくと少しも変わらない勤務に不平を言う者もあったが、精神的には安定していた。連隊復帰という心強さのためである。

しかし、本部のお膝元へ来ても休養は決してよくならなかった。ボロボロ外米メシと缶詰にかわりがない。深夜のスコール襲来も同じであった。

ジャングルにちかいせいか、尻尾のびくびく動く悪性のアノフェレス蚊が襲撃した。熱帯性マラリアを伝播する蚊である。掘立小屋では蚊張を吊って防いだが、マラリア患者は続出する一方であった。床の下からは大蟻が這い上がってきて苦しめた。そして、またまた敵機の来襲である。

敵機はワシレ飛行場を襲い、港の船舶を爆撃した。荷役作業中の私たちを狙い撃ちに、旋風のようには頭上を通過し、機銃掃射を浴びせて立ち去った。ワシレ飛行場から我が戦闘機が舞い上がって迎え撃ち、高射砲は火を吹いたが、ここでも物量を誇る敵の蹂躪にまかすだけであった。

ワシレ防空基地にはレーダーもあり、照明灯の光芒は夜闇をつんざいて敵影をお早期発見に努め、空襲警報のサイレンも鳴らしていたが、衆寡敵せず、というのが実情であった。私たちは敵機の来襲に、蜘蛛の子をちらすように逃げた。逃げるより他はなかった。各人が携行しているのは、三八式歩兵銃1丁だけであった。防空射撃の訓練はいやというほどさせられたが、いざ実戦となると何の役にもたたなかった。散開して仰臥し、敵機めがけて一発一発ポン、ポンと寝撃ちの死姿勢でやっているような、のんびりした戦争じゃない。銃口を向けている間に皆殺しになっているであろう。情けないが、逃げるが勝ち、なのである。

逃げるできない港湾中の船舶は、超低空で食い下がり暴れまわる敵機に抗しようもなかった。船は黒煙を吐いて倒れ、ぽかんぽかんと水煙のあがる暗い渦の中へ吸い込まれていった。

昼夜を問わぬ爆撃中の港の地獄絵は凄惨をきわめた。翌払暁、後始末のため海岸へ出動すると、無数の板切れや雑品にまじって、船員たちの真っ赤な肉塊がどぼんどぼんと渚に流れ着いた。船の周辺に浮かんでいた肉塊がべっこう色に洗われ、粉々になって漂流してくるのもあった。凄惨目をおおうばかりで、木っ端みじんになった船や人間の後始末など、手がでなかった。飯盒メシも腐らんばかり、港は終日死臭につつまれていた。

それでも、どこからともなくヨタヨタの貨物船が入ってきて、揚陸作業は続けられた。飛んで火に入る夏の虫同然でありながら、殺されても殺されても、武器・弾薬・糧秣を運びこもうとする貨

物船は、あとを断たないのである。それほど、ハルマヘラ島におけるワシレ港基地の重要性が思われた。

敵は遂に物量を倍加して迫ってきた。ノースアメリカン B-25 が投入されたのである。

B-25 の操縦者はほとんど豪州兵であった。かれらは、ニューギニア日本軍航空基地を粉砕するときの成功体験をハルマヘラ今島で再現しようとした。それは、「地上万物皆殺し落下傘爆弾」と称するものを使用することであった。対地攻撃用五十キロ爆弾を落下傘につけて落とすのである。落下傘をつけた爆弾は目にも止まらぬ速さで落ちてくるが、地上に接触の瞬間、水平に炸裂した。一発で広範囲の人間や物体を粉々にふきとばした。それが B-25 から一度に何発も投下されるのであった。人間がパラシュートを使って降りて来るのではない。そのパラシュートを空に見た以上、迎え撃つなどという旧来の戦闘方式は意味をなさなかった。逃げてでも無駄なのである。

私たちはまだ、落下傘爆弾を頭上に実際に見たことはなかったが（見たが最後、生きていないので）ジャングルの大木に不発で引っかかっている傘を見たことがあった。斜面落下不発で転がっているのも見た。その弾頭には不気味な鉛筆状の信管がついていた。

敵が全面的に落下傘爆弾を使用することになれば、すでに航空写真であきらかにされているはずの、飛行場、レーダー基地、高射砲陣地、陸軍司令部およびその傘下部隊は、ことごとく殲滅されるのは、もはや時間の問題である。指揮班長の山崎准尉は私に言った。

「おれはシナ事変で何度も敵弾をくぐったが、弾丸が水平に飛んでくる地上戦闘なんか、もう旧式の戦争なんだな。いくら歴戦の勇士でも頭上から落っこちてくる落下傘爆弾にかかっちゃ、手も足も出んよ。落下傘を使って皆殺し爆弾とは、敵さんも考えたもんじゃね」。

しかし、准尉は弱音をはかず、無尽の物量を駆使するアメリカの底力をみとめ、豪州兵の勇敢さをほめあげた。私は、上空から丸見えの現在の露営地が危険と思ったので、ジャングル内へ移動してはどうかと尋ねた。

じつは、中隊のほとんどが、落下傘爆弾におびえて神経衰弱になっていた。たとえば、海岸線に造ってある泥泥の急造道路をよたよたと通る友軍トラックのエンジンの音を聞いただけでも、椰子林の梢すれすれに侵入してくる B-25 ではないかと聞き耳をたて、ふるえ上がる始末であった。

猫の鳴き声におびえる鼠のようにたえず戦々恐々としているために、風が木々をゆする音にも目覚め、睡眠不足も加わって、みんな神経衰弱におちいった。

軍人として、まことに恥ずかしい話である。臆病者、とどなりつけられるに決まっていた。だがひとまずジャングル奥地へ移動するという決定があれば、精神的な転機となるかもしれない。私はそう考えて、雑談的に准尉の意向を打診してみたのだった。神経衰弱になっているから、とはまさか言えなかった。

「作戦上必要であれば、移動もやむを得んだろう」と、准尉はあっさり言った。「中隊長判断で臨機応変にやるがよい。部隊長には事後報告がきく」。

さすがに歴戦の准尉は豪胆で、切れ味がよかった。

翌日から移動準備にかかり、山に入ったのは八月十日であった。。場所は、丙と丁両栈橋の中間点からジャングル内へまっすぐに線をのぼした奥地で、翠嵐に囲まれた格好の潜伏盆地である。渚の露营地から高射砲陣地まで二百メートルあったが、さらに百メートル奥へ入ったところで、地形地物は申し分ない。上空からは絶対に見えないうっそうたるジャングル下だから、洞窟やあ遮蔽壕をつくる必要もなかった。とくに私たちを力強い気持ちにしたのは、隣接地に高射砲隊ががんばっていてくれることである。この高射砲陣地は、ハルマヘラ島最強の精鋭が守備し、セメントで築いた堂々たる砲台に、八門の高射砲がすわっていた。

守備兵たちは日の丸の鉢巻きを締め、士気さかんである。このような堅固な陣地が絶えず砲門を開いて今や遅しと敵機襲来に備えていながら、空中写真にも捕捉しがたいジャングル要塞となっているのは驚嘆に値するといわねばならない。実に頼もしい限りであった。

私たちは勇躍して宿舎の建築にとりかかった。人跡未踏のジャングル地帯なので、建築材にはことかかなかった。器材がないので大木は切り倒せないが、ナタや牛蒡剣を使って、枝や灌木を伐採した。藤蔓で柱を結び、野生の檳榔の葉で屋根を葺いた。こんどは本建築に近いバラックができあがった。扉なども竹笹の葉の模様編みをする器用な兵がいて、ガレラの乞食小屋とはくらべものにならない宿舎が建った。

兵たちは、私のために小隊長専用の小さいバラックま建ててくれた。それでも深夜の豪雨には雨漏りがした。欲もでて、より堅固なものにしようと手を加え、トラック輸送の勤務についた者が丁棧橋の体積貨物の中から軍用トラック波板を盗んできて、屋根を補強した。

トタンは光るし、夜の豪雨にたたかれると音がした。トタンの上に草葉を分厚く敷き並べると完璧な屋根ができた。中隊長はこれを見て私たちのモデルバラックに感服し、中隊命令を発した。軍用トラック波板の泥棒命令である。

雨漏りのない完全遮蔽の宿舎に長々と身をのばすと、大船に乗ったような気持ちになった。

「中さん、話せるぞ！」。

兵たちは勇躍し、大っぴらに友軍貨物をつかばらいいに出かけるあたりから、神経衰弱患者もいなくなっていた。中島中尉の独断専行と茶目っ気は、兵たちの気分転換に決定的な効果をもたらしたと言えるだろう。

宿舎の配置は、敵機に発見されないように地形地物を選びながら、各小隊約五十メートルほどの間隔をとっていた。小隊も、分隊ごとに分散していた。これで万全を期したと思うと、夜もぐっすり眠ることができた。

宿舎の付近には、奇妙な植物がたくさんあった。香辛料の原料となる等身大の草木から、強烈なショウガの匂いがはっさんしていた。足元からニョキニョキと、グロテスクな大こんにゃくが生えた。毒か薬かわからない熱帯植物のすさまじいエネルギーに囲まれたまま、誰も試食してみようという勇気は出なかった。しかし、ひとまずほっとして原始的生活の始まりを新鮮に感じていたのである。

港湾への爆撃は繰り返されていた。

私たちは荷役作業中に、侵入してきた二機の B-25 が高射砲に撃ち落とされる瞬間を見た。敵機はきまったように北方から超低空で侵入した。それを迎え撃つ高射砲は、数百メートル先で破裂する即発砲弾を用い、水平ゼロ距離射撃で一発必中、見事に撃墜したのだった。一機は丁棧橋沖合でパッと黒煙を吐き、急上昇の体勢に持ち直したと思った瞬間、真逆さまに海面に突入した。一機は傷手を負ってジャングルに突っ込み、大木にひっかかって自爆した。私たちは、高射砲陣地に向かって拍手を送った。

高射砲の活躍はめざましかった。その隣に接して住む私たちは、かれらが睨みを利かせている以上、安全であるようなきぶんになっていた。しかし時には、露营地から数百メートルの港湾で私たちが荷役作業中に、高射砲の水平ゼロ距離射撃射撃の砲弾が頭上付近で炸裂することもあったから、たまったものではなかった。

友軍の高射砲によってB-25二機を撃ち落とされた豪州の復讐は、二日後の大爆撃行となつてあらわれた。八月十四日、昼食前のことである。

この日、荷役作業には中隊の三分の二ほどの兵力が出ていた。各小隊長は露营地に残留して、兵力の三分の一を掌握し、待避壕の掘さく作業をはじめていた。そのとき、かなり遠いが、いつもと逆の方向から爆音らしきものが聞こえてきた。ここは安全地帯だと信じていたが、私は伝令の池田一等兵に偵察を命じた。

池田は猿のように樹々のあいだをぬって、急傾斜地をかけたぼっていった。次第に接近してくる爆音のゴウゴウと鳴るのが不気味なほど底力をもっていて、一機や二機でないことをものがたっている。木の上にも登っているのであろうか、池田のとんきょうな声が落ちてきた。

「あつ、あつ、来た、来た、ぎょうさんきよったわ。真つ正面、こちら向け、あつ、機首を下げよつた。来るわ、くるわ、次から次へ、あつ危ない！」

「池田、降りてこい！」

私は絶叫しておいて、バラック前面の傾斜地に滑り降りた。小隊全員に待避の号令をかけておいて、雨水のたまつた薄暗い狭い小溝のなかへ身をひそめた。ぱらぱらと五名の兵が駆け下りてきて、私のうしろのしゃがみこんだ。偶然、小さい谷底めいた地形になっていて、待避にはもつてこいの場所であつた。

空襲警報のサイレンが鳴っている、と思うと、高射砲が火を吹き始めた。敵機の大群に向かつて、撃つて、撃つて、撃ちまくる高射砲の轟音は、活火山の連続大爆発さながらに、天地空間を引き裂くばかりのすさまじさで、咆哮しつづけた。いままでかつてないワシレ最大最高の決戦が空中でくりひろげられた。泥水に半身をひたし、自然の壕をなした上堤と上堤の間の溝に窮屈な姿勢で待避しながら、やはり私は、敵機が間もなく飛び去るものと信じていた。敵機の大編隊は、ワシレ飛行場を狙つて来たものだろうから。

どうやら敵機は、私たちの頭上を通りぬけようとしているらしい。逆上した感覚に、何千何万羽と知れぬ怪鳥が金属製の悲鳴をあげながら、キイ、キイ、キイと、樹海の上を黒雲の塊となって過ぎてゆくような音響がせまっていた。轟々と、音と爆風が樹林をなぎたおして迫るらしく、頬に熱風が吹き付け、全山割れよとばかりに震撼した。

わが軍の戦闘機も食い下がっているのか、砲弾の轟音に混じって連続掃射の機銃音めいたものが、うなり吼える風をともなって、百雷が一時に鳴動落下したかのような、人間の神経がこれ以上はたえられぬほどのすさまじく不快な不協和音でかきまわした。

自然に体を固くし、鉄帽のあご紐をぎゅっと締めた。一センチでも低く首をちじめようと焦りながら、両手の人差し指で瞼をおさえ、親指の先を耳のあなに深く突っこんでいた。爆風のショック死をさけるために開けている口の中へ、砂まじりの灼熱の閃光爆風がとびこんでくる。山の傾斜を伝わってパラパラと落ち崩れて来る砂礫に鉄帽がたたかれた。鉄帽は何回も浮き上がり、その都度、あご紐がのどを締め付けた。

砂塵はもうもうとして、一寸先もみえなかった。息がつまり、耳はひりひり痛んだ。五感の責苦に扼殺のあご紐が息の根を止め、灼熱の閃光爆風は火炎放射器を浴びているかのような。一秒一秒が永劫の長い長い時間の責苦となって私をうちのめす。敵機はまだ通過しないのか。いや、頭上で何事かが起こっている。落下傘爆弾とはちがう皆殺し兵器を発明した敵は、私たちを島もろとも覆滅しようとして、B-25から何かを仕掛けているのだ。私は恐怖のどん底の中でそんなことをちらりと考え、いつのまにか目・鼻から手を離して、祈るように合掌していたのだった。

断末魔の私のまぶたに、忽然と光の環があらわれ、父と母の顔がうかんだ。こんなところで死にたくなかった。こんなつまらない死はいやだった。だが、もう、どうしようもない。

「昭和十九年八月十四日、お先にごめん」。私は心の中で別れを告げ、じっと両手を合わせていた。

気がつくと敵機の爆音は遠ざかっていて、「小隊長殿、大丈夫ですか」という池田一等兵の声がきこえた。

死んだはずの私が生きている。「お前も大丈夫か」と叫び、泥や砂で顔じゅう真っ黒になり眼だけ光らせている池田を眺めた。他の四名も走り寄ってきて、「ひどかったですなあ。もう行きましたよ」と言いながら砂だらけの唾をぺっぺっと吐いた。

周囲の状況は一変していた。樹木はなぎ倒されてところどころ青天井になっており、まだた倒れつつある木もあった。枝は引きちぎられ、幹には爆弾の破片がつきささっていた。ギザギザになった出刃包丁ほどの破片が、幹にぐっさりとかいこんでいる。

天地鳴動の轟音は、敵機の絨毯爆撃によるものであった。

私は不思議に、かすり傷一つ受けていなかった。ジャングルのところどころがえぐり取られて平原になってしまうほどの大爆撃に遭いながら、かすり傷も受けないとはなんとという奇跡であろうか。天祐神助というより他はない。

ただし、我が小隊のバラックは、トタン屋根が全部吹っ飛び、丸太でびっしり組んだ揚げ床だけが残っていた。私の個室は木っ端みじんになっていたが、吊るしておいた半袖シャツは、胸にギザギザの大穴を穿って、床の上に倒れたまま微かな風に揺れていた。私はシャツを拾い上げ、これが身代わりになってくれたのだと、つくづく眺めた。

海岸線に作業に出ていた兵たちが、真っ青な顔で戻ってきた。山が変形するほどやられたので中隊全員木っ端みじんに玉砕したと思った、という。海岸で遠望していた彼らの目には、B-25の編隊は一列縦隊で一波、二波と襲来し、高射砲陣地を落下傘爆弾による絨毯爆撃を行った、と状況判断していた。目標は私たちではなかった。恨み重なる高射砲陣地を一挙に粉砕すべく、復習をこころみたものらしい。

言語に絶する私たちの修羅は、偶然に高射砲陣地の隣接区域にいたためのとぼっちりと知れた。三十機以上の二個編隊による高射砲陣地直撃が、敵の作戦目的であったのである。

中隊本部は奇跡的に無事であったが、他の小隊は損害を受けていた。連隊本部からも救護、調査の二個分隊がトラックを走らせてきた。戦死、将校二名、下士官兵十二名。重症、将校一名、下士官兵十三名である。支隊は散乱していた。肉塊だけが転がっているのもあった。地面からぬっと手首だけ出ているのもあった。

氏名を確認した死体から腕と脚を切り取って茶毘にふし、遺骨にして箱に納めた。死体は土葬にし、碑を建てた。重症者は即座にトラックで野戦病院へ運んだ。

私たちに大きな衝撃をあたえた最初の犠牲のうち、将校同士で特に親しくしていた第一小隊長の浦川少尉（京都市嵯峨出身、国学院大学卒）、第三小隊長の郷祥少尉（大垣市御望出身、明治大学卒）の戦死は、私を悲嘆のどん底に突き落とした。一時間前までは元気に談笑していたのが、忽然と消えてなくなる。しかも、顔もわからなくなるほど凄惨な肉塊となって散らばった。戦争の恐ろしさ、残酷さ、むなしさを、これほど強烈に知らされたことはない。僚友の死は、あまりになまなましかった。

浦川恵一の死は、部下七名とともに肉片もとどめぬほどの無残な木っ端みじんであった。腰の深さほどの急造待避壕へ踊りこんだ瞬間、ただ一個の爆弾が八名の真ん中へすっぽり落下命中したのである。悲運というよりしかたがない。

郷祥の場合は、肩、腹、大腿部を爆弾の破片でえぐりとられ、血糊がぎざぎざの傷口にへばりついていて。爆撃直後私は、私の小隊の損害報告をするべく、中隊本部へとやぶをかきわけて進む途中、（誰がこんなことを予想しただろうか！）、一木一草ことごとくかきむしりとられた小さい窪地に、人並みはずれて紅顔の美青年であった郷祥少尉が、真っ青になって仰向けに倒れていた。私は思いたまらず大声で「郷、しっかりしろ」と三度叫んだ。しかし彼は、最後にかすかな小声で「おん」と、ひとことだけ応えた。その傍らで橋本衛生伍長が一人で手当をはじめていた。それから彼は、ジャングル山から担架で海岸線の道路へ担ぎ出され、たまたま通りかかったトラックに載せられ、丁地区の奥地にある痩せb b病院へ収容されるべく向かった。しかし、そのガタガタ道を走り行くトラックの上で、看護兵に見守られながら両手を突き出し、万歳の姿で息を引き取ったという。

常日頃、実に精勤であった彼のことだ。人生最終に臨んで両手を突き出したその瞬間、どんなに苦しかったことか。残念で、死んでも死にきれなかつただろう。

第四小隊長の寺内少尉（大阪州市岡出身、師範学校卒）は、脊椎骨すれすれnお部分を深くえぐられた。骨の見える重症であったが、一命はとりとめた。死者も生者も一ミリの差で決した運命にすぎない。私は人間の神経がこれ以上は耐えることができない狂喜すれすれの恐怖を経験しただけ

であったが、その直後に、かれら戦友たちは死んだのである。恐怖に続くものが死であるなら、あまりに残酷すぎる。

連隊本部の調査隊とともに隣接地の高射砲台を視察して、酸鼻をきわめた状況に慄然とした。隊長以下百名のうち、二十数名が戦死し、数十名が重軽症を負っていた。堅塁を誇った陣地は、円形の今季リートの外壁と台座が直撃段でぶちぬかれ、砲もめっちゃめっちゃに破壊されていた。周囲二。三十メートルは一木一草ことごとくふきちぎられ、惨憺たる廃墟と化していた。

高射砲はたった一门だけ、生き残った古武士のように修羅の跡にうずくまっていた。散乱するコンクリートや鉄骨の堆積のなかに、くだけた鉄帽がころがっており、血みどろの顔の断片が付着していた。倒れた木の梢に落下傘がひっかかって、地上をなでていた。

戦友の死を見ることは、自分の死より恐ろしかった。人は自分の死を見ることはできず、他人の死しかみることはできないのだから。

午後五時ごろ、中隊は山を下って渚へ終結した。戦死者の遺骨は白木の箱に入って、戦友の首に吊るされていた。中島中隊長は抜刀して、隊員をジャングルに向け、戦死者に対する一分間の黙禱を号令した。それから英霊に、一階級昇進の連隊命令を伝達した。

死んだ者が、一等兵から上等兵に昇進したところで何になろう。少尉が中尉になったところで何になろう。戦争も生きていればこそそのことである。

(第一部 終)